

令和3年度大学図書館職員長期研修講義
「大学と大学図書館」

令和3年7月5日（於 筑波大学）

東北大学副学長（広報・共同参画担当）
附属図書館長
大学院医学系研究科 教授
大隅 典子

1. コロナ禍の図書館に感じること

東北大学附属図書館長としての任期を折り返しました。一昨年度末から始まった新型コロナウイルス感染症への対応は、3年度目に突入したことになります。当初、どのような感染症であるかについての実体が不明なまま、昨年4月、第1回目の「緊急事態宣言」発出を受けて、本学附属図書館も2か月間の休館に追い込まれたということは、もっともショッキングな出来事でした。いつもそこにあると思っていた日常が奪われるということについて、自分自身が体験した訳ではありませんが、先の大戦の頃や、紛争の続いている世界の状況に思いを馳せました。

当初、接触感染について非常に懸念され、図書館では書籍の貸出・返却に伴うリスクについて問題視されましたが、今は飛沫・マイクロ飛沫感染の対応として、マスク着用、フィジカルディスタンス、換気の3点がもっとも重要なポイントだという共通理解が広まっていると思います。しいて言えば、COVID-19 対応のためにテレワークが可能となったことは、働き方改革として今後、長期にわたる大きな意味があったと思います。

本学は令和2年度当初より、新入生のBYOD（Bring Your Own Device）ポリシーが適用される予定であったため、オンライン授業への対応は早かったと思います。しかしながら、キャンパスに来る学生が激減し、休館が明けても図書館来館者は例年のレベルまで戻りませんでした。本学附属図書館では「Go To 図書館」キャンペーンを展開し、安心安全な図書館という環境を最大限活用してもらおうべく、種々の工夫を続けていますが、ヴァーチャルな生活に慣れた学生にとって何が求められるのか、さらに一工夫、必要かもしれません。

2. 各種の大学ランキングについて思うこと

デジタル化とインターネットの普及は私たちの世界を大きく変えました。私自身がいわゆる理系分野で研究しているために、よりそのことを感じるのかもしれませんが、いつでもどこでも論文情報にアクセスできるようになったことと引き換えに、その論文のダウンロード数、引用数、FWCI (Field Weighted Citation Impact) や当該学術分野における立ち位置 (Top 10%論文等) もリアルタイムでわかるのです。このようなデータは、例えば *h-index* のような研究者個人の論文発信力の数値化にとどまらず、研究者が所属する大学のランキングにも用いられるようになりました。

直近では、Times Higher Education (THE) が Asia University Rankings 2021 を発表したところですが (※1)、この指標の中にもしつかり“citation”が含まれています。日本の大学では、東京大学が第6位、京都大学が第10位、そして我が東北大学は第27位となっており、いずれも前回よりも順位を上げてはいますが、引用のスコアが非常に悪いことが特徴です。

民間の会社は、例えば1936年創刊の『会社四季報』のような媒体において、他者からの評価を受けてきた長い歴史がありますが、アカデミアの研究機関はようやく最近になって、各種のランキングに一喜一憂するようになった訳で、まだ耐性が付いていないとも言えます。THE その他のランキングだけで、大学等の実力すべてを測れるものではありませんし、より広く言えば学術情報の商業化の網に絡め取られていることも否めませんが、研究者が (多くの場合、税金をもとに) 行った自分の研究成果を発信し、広める努力を惜しんでいるとすれば、たいへん残念なことではないでしょうか。

※1 Asia University Rankings 2021 (Times Higher Education, 2021.6.2)

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2021/regional-ranking>

3. 誰が「知のコスト」を払うのか？

2021年3月17日付けのNature誌に、興味深い3本の論文が掲載されました。いずれも初期発生を解析するための技術開発に関するもので、2本はヒトの多能性幹細胞 (iPS細胞のような細胞) をもとに、「胚盤胞」と呼ばれる段階まで発生を進めることができたというもの、もう1本は、マウスの着床直後の胚を子宮外で5~6日間、発生を進ませることができた、というものでした (※2)。

この3つ目の論文について、「なぜ今頃、この論文が Nature なのか？」と思うとともに、すでに 1980 年代後半に、齧歯類胚を 100 時間培養できる技術を持っていた研究室で学位を取得した身として、我々の過去の論文が引用されていないのは不適切と感じて、その論文の「コメント欄」に物申そうと考えました。

そのために、種々、関連する昔の論文を確認してみようと思った、とある週末。1970 年代、1980 年代の論文を PubMed で探しまくり、論文題目や著者から該当論文の目星はついたものの、原論文は本学図書館には電子媒体として存在せず……。本学では 1997 年以降の Nature でないと PDF をダウンロードできないことがわかり、逡巡した挙げ句、(いつでも読める PDF にするのも癪だったのでケチって)「48 時間のみ閲覧可能な電子媒体」として購入。そして、コメントを書きました。

自分が大学院生だった頃は、図書館に行って、製本された Nature を探し、目的の論文のコピーを研究室に持ち帰り、紙の縁が擦り切れるまで読むことは日常の研究活動でしたが、もはや、いつでもどこでもアクセスできない・読めないことは、耐え難いストレスになることを実感しました。

図書館職員の方に伺ってみると、「1970~1980 年代の Nature 論文を PDF で読めるようにするには、バックファイル・パッケージを購入する必要があり、2000 万円以上かかります」と言われ、さらにのけぞりました。しかも、私が探していたとある原著論文は、たった 3 ページのもので、マウス胚を着床前から着床後まで子宮外で培養できる、ということが書かれているのですが、当時、「誰も実験結果を再現できない」と言われた、「眉唾論文」だったのです。そういう論文モドキも含めてのパッケージなのですが、そのコストは誰が負うべきなのでしょう？

ちなみに、なるべく建設的に書いたコメントには、さらに著者からの返答があり、数回続いたそのやりとりは、“Find a great discussion”というお知らせとしてメールで届きました。最終的には、元の Nature 論文の責任著者が日本の匠の技の粋を極めた全胚培養装置をカスタムオーダーで作製し、輸出して使ってもらおうというオチになったという意味では、とても現代的な経験となりました。

※2 Nature 593, 119-124 (2021)

<https://www.nature.com/articles/s41586-021-03416-3>

4. ヴァーチャルとリアルのいいとこ取りは？

東北大学附属図書館では、貴重な古典資料のデジタルアーカイブ化を進めています。国文学研究資料館とは、狩野亨吉のコレクション「狩野文庫」等のアーカイブ化について連携しており、2020年9月にはオンライン公開に関する共同発表を行いました（※3）。10万点を超える江戸古典籍を中心としたコレクションのうち、第一弾として232点、13,073コマの画像が、国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」上で公開されました。

また、「漱石文庫」に関しては、夏目漱石の自筆の日記や手紙等の肉筆資料に関して、2019年末に行ったクラウドファンディング（CF）のご支援をもとにデジタル化し、2020年12月に公開することができました。CF期間中、多数の方々の暖かい励ましを頂いたことは本当に得難い経験でした。

一方、リアルな書籍や原稿等は、単に二次元のデータであるだけでなく、三次元の物体としての質量や、紙の手触り、インクの香りなども伴う資料です。貴重なコレクションを損なわずに適切に保管することの重要性と、より多くの方々が至宝に触れるというリアルな体験のバランスをどのように取っていくのか、コロナ禍の間に考えておくことも重要かもしれません。

※3 東北大学附属図書館、同館が所蔵する「狩野文庫」のデジタル化画像の公開を開始
（カレントアウェアネス・ポータル, 2020.10.5）

<https://current.ndl.go.jp/node/42171>